

## □調査報告□

## コメディカル専門語彙に使用される漢字の出現傾向調査 —留学生向け学習漢字の選定とワークブックの試作(第1報)—

石鍋 浩\*

## 抄 録

留学生への学習支援を目的としてコメディカル専門語彙に使用される漢字、延べ約1万2千字、異なり(出現漢字の種類)約1,200字の出現傾向と出現頻度について調査した。その結果、上級レベルの出現割合が高く、留学生一般の学習範囲外の漢字も全体の13%(約160字)を占めた。一方、出現頻度を検討したところ、学習範囲外の漢字約160字中頻度上位100字の段階で全体の9割以上を占めた。ここから、適切な漢字を適切に配置することによって、コメディカル専門語彙に使用される漢字学習の効率化の可能性が示唆された。

また、調査結果を基礎資料として、出現頻度およびレベルに基づく学習漢字を選定し、ワークブックを試作した。

**Keywords:** コメディカル専門語彙, 留学生, 学習漢字

## I. はじめに

コメディカル専攻の留学生にとって、専門語彙の学習には多くの困難が伴う。特に、医学術語は日本人にとっても難解であるが、日本語を母語としない外国人留学生にはさらに難解であり、留学生に対する教育の効率化と充実のための専門語彙の基礎資料化とそれに立脚した教育実践が不可欠である(増田ら 2004)と言われている。しかし、医学系留学生のための教材は極めて少なく(松元 2000)、管見の限りでも増田ら(2006)による辞典が留学生を対象としたものとして唯一である。

本学では、2007年度現在30名の学部留学生が大田原キャンパスで学んでいる。出身は5地域(中国20名、韓国6名、ミャンマー1名、タイ2名、カンボジア1名)、所属は7学科(看護4名、理学療法7名、作業療法2名、放射線・情報科学2名、医療経営管理10名、医療福祉3名、薬2名)である。そのバックグラウンドは、私費はもとより国費、さらには本国で医療従事者としての経験を有

する者まで多岐に渡るが、各人の日本語のレディネスに関わらず入学直後から専門性の高い科目を履修する必要がある。その中でも、コメディカル専門語彙に使用される漢字の読み方は、母語背景を問わず本学の留学生にとって学習上の負担となっている。このように読み方が曖昧なまま実習等に臨んだ場合、同僚や患者との意思疎通に支障をきたす恐れもあるため、専門語彙の概念学習同様、漢字を正しくかつ効率的に学習するための支援方策の確立が急務となっている。

しかし、コメディカル専門語彙に使用される漢字学習支援のための基礎調査および資料の蓄積はこれまで行われてこなかった。そこで、このような現状に対応することを目的とし、本学学部1,2年生が主に履修する専門科目のコメディカル専門語彙に使用される漢字の出現傾向についてパイロット調査を行った。また、そこで得られた基礎資料に従い学習漢字を選定した後、出現頻度順・レベル別に配置したワークブックを試作した。

受付日: 2007年8月21日 受理日: 2007年10月10日

\*国際医療福祉大学 国際交流センター

Center for International Exchange, International University of Health and Welfare

E-mail: steintopf@iuhw.ac.jp

II. 方法

1. 対象の学生と対象科目の選定

本学の留学生が抱える問題への対応という目的から、大田原キャンパスで学ぶ全ての学部留学生を対象とした。

対象科目は、本学『学習の手引き』（平成18年度版）を参照し、学科間の共通性が高く必修指定の多い科目で、かつ入学後早い段階で履修する可能性の高い科目である「公衆衛生学」「リハビリテーション概論」「解剖学」の3科目とした。

公衆衛生学は、「専門基礎／学部共通」に区分される科目で、9学科中5学科で必修に指定されており他の4学科でも選択に指定されている。また、リハビリテーション概論も「専門基礎／学部共通」に区分される科目で、7学科（医療福祉学科はコースによって異なる）で必修に指定されている。ここから、学科を問わず本学留学生が履修する可能性の高い専門科目であると判断し、まずこの2科目を選定した。解剖学は、「専門基礎」に区分される科目であるが、解剖用語は難解な漢字を含み（松元2000）、外国語としての日本語の一般的な学習範囲をはるかに超える漢字が含まれる点、7学科で必修に指定されている点を考慮し、対象科目に加えた。選定3科目の科目上の区分および学科ごとの必修・選択別の一覧を表1に示す。

2. 対象書籍と調査方法

調査対象3科目の関連書籍を選定した。当該分野の書籍の数は膨大な数に上り、全ての書籍を網羅することは不可能である。そこで、本学図書館の蔵書であれば留学生も必要な際に容易にアクセスできることから、本学図書館の検索システムにヒットした次の3冊を対象とした。

- 1) 公衆衛生学：鈴木庄亮ら 2005, シンプル公衆衛生学 2005, 南江堂
- 2) リハビリテーション概論：Rothstein JM ら 2002, リハビリテーションスペシャリストハンドブック, 南雲堂
- 3) 解剖学：藤田恒太郎 1947, 人体解剖学, 南雲堂

これら3点の関連書籍の索引に記載された漢字を抽出し、字数をカウントした。得られた結果について日本語能力試験の出題範囲を基準に出現傾向および出現頻度の分類を行った。なお、字数のカウントに当たっては、石鍋（2007）の報告の際に正字と異体字の扱い（例えば「頸」と「頸」）について受けた指摘を考慮し、再度検討を行った。

「日本語能力試験」は、財団法人日本国際教育支援協会が主催する外国人のための言語テストである（海外では国際交流基金が主催）。毎年1回、12月に実施され、1984年の第1回目から数えて2006年度で23回目を迎えた。2006年度は、日本

表1 3科目の科目上の区分および学科ごとの必修・選択別の一覧

科目名	学科 科目区分	NS	PT	OT	ST	ORT	RT	HS	HM	PS
		公衆衛生学	◎	△	◎	△	◎	◎	△	△
リハビリテーション概論	◎	◎	◎	◎	◎	◎	△	◎ △	△	△
解剖学	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	—	—	◎

(注1) 平成18年度版『学習の手引き』を基に作成。NS：看護学科，PT：理学療法学科，OT：作業療法学科，ST：言語聴覚学科，ORT：視機能療法学科，RT：放射線・情報科学科，HS：医療福祉学科，HM：医療経営管理学科，PS：薬学科

(注2) 「◎」は必修科目を，「△」は選択科目を，「—」は指定なしを表す。また，リハビリテーション概論は，医療福祉学科（HS）の介護福祉士コースでは必修科目に，同総合社会福祉コースでは選択科目に指定されている。

国内 20ヶ所、海外は 40 の国・地域の 130 都市で実施され、国内で延べ 72,880 人が、また海外では延べ 364,480 人が受験した。レベル区分、構成、認定基準等は表 2 の通りである。4 級が最も初級のレベル、1 級が最上級レベルに当たる ([http://www.jees.or.jp/jlpt/pdf/result\\_2006\\_all.pdf](http://www.jees.or.jp/jlpt/pdf/result_2006_all.pdf), 2007.06.01 閲覧)。レベルの認定であるが、400 点満点中、4・3・2 級が 60%以上、1 級が 70%以上で合格となる。

日本語能力試験の各レベルまでに学習すべき漢字の概数は、表 2 の「認定基準」欄に示した通りであるが、1 級 2,000 字程度の内訳は、常用漢字 1,945 字から 19 字除き (1945-19=1926)、それに常用漢字外の 110 字を加えた合計 2,036 字である (1926+110=2036)。常用漢字から除外された 19 字は、当用漢字<sup>1</sup> 実施後ほとんど使われなくなったため試験範囲から除外した漢字 (国際交流基金 2002) で、これを「第 1 水準」の漢字としている。

また、110 字の追加分は、「常用漢字表」の表外の漢字について特定の音訓 (例えば、「隙間」の「隙」) の範囲で出題するものとし、これを「第 2 水準」の漢字としている (国際交流基金 2002)。

このように、各レベルの語彙との関係、意味上の相互関係、点面の難易度等を考慮して日本語能力試験では、4 級 80 字、3 級 164 字、2 級 748 字、1 級 934 字、第 2 水準 110 字が定められている (国際交流基金 2002)。表 3 は漢字出題基準の一覧である。常用漢字の表内字かどうかを見ると、第 2 水準は表外字である。また、第 1 水準は試験範囲に含まれない。以上、4 級～1 級に第 2 水準を加え、試験範囲は 2,036 字となる。

### 3. 学習漢字の選定と配置およびワークブックの試作

今回の調査結果を元に、本学留学生を対象とし

表 2 日本語能力試験認定基準

級	構成			認定基準
	種類	時間	配点	
1	文字・語彙	45 分	100 点	高度の文法・漢字 (2,000 字程度)・語彙 (10,000 語程度) を習得し、社会生活をする上で必要であるとともに、大学における学習・研究の基礎としても役立つような、総合的な日本語能力。日本語を 900 時間程度学習したレベル。
	聴解	45 分	100 点	
	読解・文法	90 分	200 点	
	計	180 分	400 点	
2	文字・語彙	35 分	100 点	やや高度の文法・漢字 (1,000 字程度)・語彙 (6,000 語程度) を習得し、一般的なことがらについて、会話ができ、読み書きができる能力。日本語を 600 時間程度学習し、中級日本語コースを修了したレベル。
	聴解	35 分	100 点	
	読解・文法	70 分	200 点	
	計	140 分	400 点	
3	文字・語彙	35 分	100 点	基本的な文法・漢字 (300 字)・語彙 (1,500 語程度) を習得し、日常生活に役立つ会話ができて、簡単な文章が読み書きできる能力。日本語を 300 時間程度学習し、初級日本語コースを修了したレベル。
	聴解	35 分	100 点	
	読解・文法	70 分	200 点	
	計	140 分	400 点	
4	文字・語彙	25 分	100 点	初歩的な文法・漢字 (100 字程度)・語彙 (800 語程度) を習得し、簡単な会話ができて、平易な文、又は短い文章が読み書きできる能力。日本語を 150 時間程度学習し、初級日本語コース前半を修了したレベル。
	聴解	25 分	100 点	
	読解・文法	50 分	200 点	
	計	100 分	400 点	

<sup>1</sup> 国語施策の一つ。昭和 21 年 (1946) 11 月 6 日に「当用漢字表」として内閣告示で定めた。字数 1850 字。その後、昭和 56 年 (1981) 10 月 1 日に「常用漢字表」が内閣告示第 1 号として公示された。字数 1945 字。当用漢字表が、日常使用する漢字の範囲を示したのに対し、常用漢字表は、漢字使用の目安であって、制限的なものではないとした点に大きな相違がある (日本語教育学会 1982)。

表3 日本語能力試験の漢字出題基準一覧

	4級	3級	2級	1級	第2水準	第1水準
常用漢字	○	○	○	○	×	○
試験範囲	○	○	○	○	○	×
字数	80	164	748	934	110	19

(注)「常用漢字」は4級～1級、第2水準、第1水準がそれぞれ常用漢字内かどうかを示す。また、「試験範囲」はそれぞれが試験範囲に含まれるかどうかを示す。「字数」は、それぞれの漢字の数である。

表4 出現漢字の概要

	4級	3級	2級	1級	第2水準	第1水準	範囲外	計
延べ	2395	2766	8784	4893	210	3	1051	20102
異なり	65	133	513	371	20	2	160	1264

た学習漢字を270字選定した。配置順は出現頻度やレベルを基準に決定した。さらに、本学留学生対象の日本語の授業で使用するワークブックを試作した。

### III. 結果

#### 1. 概要

今回の調査の結果、延べ20,102字、異なり(出現漢字の種類)1,264字を抽出した<sup>2</sup>。表4は、出現漢字の概要である。今回の調査で出現した漢字の異なり字数を見ると、2級レベルが513字と最も多く、次いで1級レベル371字、試験範囲外160字の順で出現している。

各レベルの漢字が異なり1,264字に占める割合を示すと、図1のようになる(第1水準の2字は試験範囲外に含めた)。これを見ると、1級レベルが29.4%、第2水準1.6%、範囲外+第1水準12.8%と、上級レベルの漢字が全体の約44%を占めていることが分かる。さらに2級レベルまでを含めると、全体の84%に達する。一方、3級、4級レベルは2つ合わせても約16%に過ぎない。

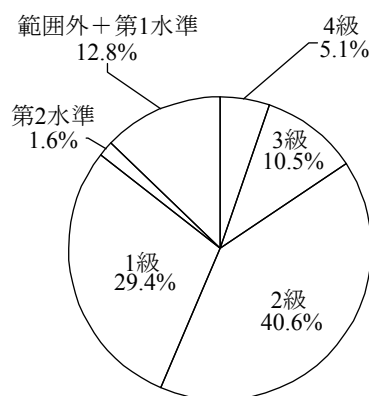


図1 専門書に出現した異なり1,264字に日本語能力試験の各レベルが占める割合

以上、今回の調査の結果ではコメディカル専門語彙に使用される漢字は上級レベルの出現割合が高かった。そのうち、外国人が一般的に学ぶ範囲を超える漢字は全体の約13%を占めた。

#### 2. レベル別の出現割合

本節では日本語能力試験のレベル別に、異なり1,264字の出現傾向について検討する。異なり1,264字に占める割合は、2級レベルが約41%と最も高かったが、能力試験出題範囲の各レベルに占める

<sup>2</sup> 計量的な語彙調査において語彙の量を示すものとして「延べ」語数と「異なり」語数がある。延べ語数は出現した語の総数を、「異なり」語数は言語資料がいくつの異なった語でまかなわれているかを示す(日本語教育学会 1982)。本稿では、出現漢字の総数を「延べ」、出現漢字の種類を「異なり」と表現する。

割合はどのようになるか。出現漢字と非出現漢字に分け、レベル別に見たところ、4級レベルの漢字80字のうち出現したのは65字、残り15字は出現しなかった。このように、【出現/非出現】で見えていくと、3級(164字)は【133字/31字】、2級(748字)は【513字/235字】、1級(934字)は【371字/563字】、第2水準(110字)は【20字/90字】であった。出現漢字と非出現漢字の割合をグラフにまとめると図2のようになる。

第2水準は110字のうちの18%、1級レベルは934字のうちの40%と、出現漢字はレベル内の出題範囲の一部であることが分かる。以上、今回の調査の結果、上級レベルで出現するコメディカル専門語彙の漢字は、出題範囲の中の限られた漢字であった。

### 3. レベル別の出現頻度

次に、レベルごとの出現頻度の結果を見る。表5は、各レベル上位何字目までで全体の何パーセントを占めるかを一覧にしたものである。1級レベルを例に見ると、頻度上位100字の段階で全体の約8割を占め、上位200字の段階では全体の9割以上を占めていることが分かる。同様に、第2水準で出現した20字のうち、半数の10字の段階で全体の約9割を占めている。また、能力試験範囲外の漢字も、上位100字の段階で全体の94%を占めている。ここから、コメディカル専門語彙に使用される漢字は、限られた漢字が繰り返し出現する傾向が認められる。

この結果は、適切に選ばれた漢字を適切に導入することにより学習の効率化が図られる可能性を示唆している。例えば、1級で適切に選ばれた200

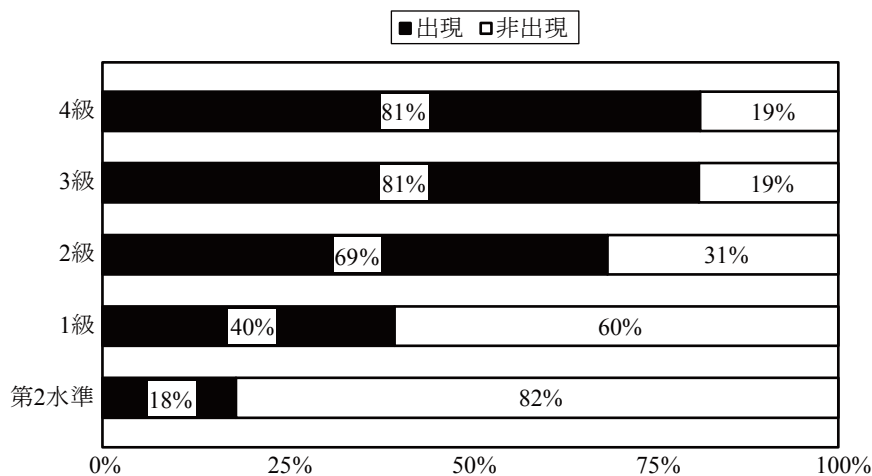


図2 出現漢字と非出現漢字の日本語能力試験レベル別割合

表5 日本能力試験のレベル別、出現漢字の頻度

レベル (出現字数)	4級 (65)	3級 (133)	2級 (513)	1級 (317)	第2水準 (20)	範囲外 (162)
出現頻度上位10字	50.4%	39.0%	23.5%	34.3%	90.5%	40.4%
〃 50字	89.6%	80.8%	49.6%	65.2%	—	81.4%
〃 100字	—	97.9%	68.2%	81.2%	—	94.3%
〃 200字	—	—	86.7%	94.4%	—	—
〃 300字	—	—	94.4%	98.5%	—	—
〃 500字	—	—	99.6%	—	—	—

字を適切に学習することによって、全体の約94%をカバーすることが可能である。同様に、学習困難な試験範囲外の漢字も頻度上位100字を学習することで全体の8割以上のカバーが可能である。

#### 4. 学習漢字の選定と配置

ここまで見てきたように、留学生にとって学習困難なコメディカル専門語彙に使用される漢字を適切に選択・配置することにより、学習の効率化が期待される。そこで、今回の調査結果を基礎資料とし、学習漢字を選定した。選定は、次の方針のもと行った。

- (1) 本学留学生の専門語彙学習に役立つものであること。
- (2) 週1回実施、1学期間で学習が終了する分量であること。
- (3) 入学後できるだけ早い段階で履修し、関連科目の学習の補助となること。

具体案であるが、(1)の方針に沿うため頻度の高い漢字を優先することとした。また、(2)の方針に沿うため、1日3~4字の学習であれば負担も少なく実現可能と判断した。単純計算すると、1日3~4字、週6日学習で1週間18~24字となる。これを12週行ったとすると216~288字となることから、270字程度を目安とした。さらに、(3)の方針に沿うため、専門性の高い漢字を優先的に導入することとした。専門性の高い漢字は、一般的な外国人日本語学習者の学習範囲を超えるため、入学前の予備教育段階で学習するケースはほとんどない。それにもかかわらず、留学生であっても入学と同時に専門領域の語彙に晒されることから、早い段階で導入が必要であると判断した。

以上、(3)の方針より、範囲外、第2水準、第1水準の漢字を優先的に導入することとした。導入対象の範囲外160字、第2水準20字、第1水準2字の合計182字は、(2)の方針に沿った分量から見て学習可能な字数であると判断し、全て盛り込

むこととした。

残り約90字の選定であるが、(1)の方針より1級レベルの頻度上位90字前後を調べたところ、上位86字から88字までが出現度数13、上位89字から98字までが出現度数12の漢字であった。上位88字を分割点にすると182字+88字=270字となることから、(1)の頻度と(2)の字数の方針に照らし合わせ、上位88字を分割点とした。なお、1級レベル上位88字が全体に占める割合は78.3%で、専門語彙に使用される1級レベルの漢字の約8割の学習が可能である。

今回の調査結果を基に選定・配置した漢字の一覧を表6に示す。右端「延べ字数に占める割合」の欄は、各行最後列の時点でのレベル全体に占める割合を表す。例えば、1級5行目(10)列の65.2%は、頻度上位50字「庭」の段階で、1級の延べ出現漢字8,784字の65.2%を占めることを表す。授業では、1級レベルで出現頻度の最も高かった漢字から始め(筋、脈・・・)、第2水準(蓋、膝・・・)、範囲外(腺、頸・・・)、第1水準(鍾、婆)の順で学習していく。

#### 5. ワークブックの試作

今回の調査から得られた結果を基礎資料として選定した学習漢字270字を授業で使用するためのワークブックを試作した。ワークブックは、練習部分と巻末の索引から成る。

図3に練習部分の一例を示す。太枠に囲まれた漢字が学習漢字である。ここに示したのは、範囲外漢字、出現頻度上位3位の漢字「窩」であるが、これは選定270字中111字目に当たる。それを通し番号として見出しの左側に示した。また、通し番号の下に当該漢字(ここでは「窩」)の総画数を付した。見出しの右側には、漢字の読み方および意味を記入する欄を、さらにその右側に頻度とレベルの情報を付した。頻度は、☆:1~10, ☆☆:11~20, ☆☆☆:21~50, ☆☆☆☆:51~100, ☆☆

表6 選定した学習漢字270字

		(1)	(2)	(3)	(4)	(5)	(6)	(7)	(8)	(9)	(10)	延べ字数に占める割合
1級 88字	1	筋	脈	節	膜	法	健	症	保	環	腸	34.3%
	2	髓	核	染	康	胞	射	眼	舌	護	孔	45.8%
	3	肺	系	炎	障	疾	診	視	陰	維	酸	54.1%
	4	剖	基	甲	尿	衛	交	裂	菌	巢	養	60.4%
	5	織	洞	索	隔	鎖	条	態	溝	肢	庭	65.2%
	6	祉	傷	盤	福	幹	茎	肝	弓	尺	垂	69.3%
	7	房	疫	応	策	縮	唇	翼	仙	槽	網	72.9%
	8	異	滑	公	泌	麻	循	徴	桃	糖	弁	76.1%
	9	援	鼓	聴	標	慢	宮	挙	脱			78.3%
第2水準 20字	1	蓋	膝	腎	腫	頬	肘	喉	股	蝶	隙	90.5%
	2	爪	眉	梢	腫	垢	咳	叩	貼	枕	蘇	100.0%
範囲外 160字 + 第1水準 2字	1	腺	頸	窩	脊	椎	腿	腔	顎	叢	咽	40.4%
	2	肋	腱	穹	靱	棘	錐	疹	囊	叉	脘	57.4%
	3	腋	尖	腓	白	痕	坐	鞘	橈	驗	脛	67.7%
	4	蝸	嗅	扁	朮	呆	瘍	篩	肛	膀	臍	75.7%
	5	斑	稜	膠	膝	楔	顆	牙	塞	菱	咬	81.5%
	6	喘	圈	鈎	蝕	唾	弛	梨	鱗	寫	漿	85.4%
	7	脾	踵	鞍	鎌	梗	杖	穿	曝	吻	沫	88.5%
	8	亢	攀	泄	痺	趾	烏	鋸	窄	塵	須	90.9%
	9	糞	蜂	勃	侯	蒙	咀	躁	嚼	罹	扼	92.8%
	10	痰	睫	辜	糜	緻	闕	岡	廻	悉	柴	94.3%
	11	龜	桔	珪	牽	昏	控	晒	槻	蹄	釘	95.2%
	12	榛	趨	蒼	椿	茸	智	槻	蹄	蹄	釘	96.2%
	13	填	套	藤	萄	虹	捻	播	函	鳩	斐	97.2%
	14	葡	婉	庖	孟	弥	蘭	播	淋	鷲	喀	98.1%
	15	埃	徊	徘	截	瀟	猩	疼	瘡	瘤	皴	99.1%
	16	絨	蕾	蠕	褥	譖	踞	蹠	躄	輻	頤	100.0%
1	錘	婆									100.0%	

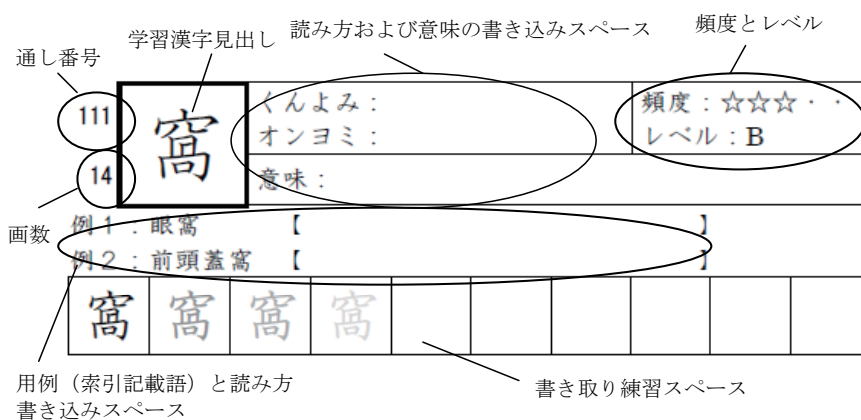


図3 ワークブック試作版

☆☆☆：101以上とした。また、レベルは、1級レベルを「1」、第2水準を「A」、範囲外を「B」、第1水準を「C」とした。見出しの下の部分には、用例とその読み方を記載するスペースを設けた。用例は、調査対象とした3冊の書籍の索引に記載さ

れているものを採用した。一番下は、書き取り練習用のスペースとなる。

索引には、総画数、部首、代表的な音訓を記載し、総画数順および部首別を作成した。図4に総画数順および部首別の索引の例を示す。練習部分

にも総画数を記載したが、漢和辞典を使用すれば、これら画数および部首情報を手がかりに自律学習が可能となるようにした。また、異体字等についての情報を備考欄に付した。

IV. 考察

1. 日本語能力試験の出題範囲に占める割合

今回の調査で出現した漢字を日本語能力試験の出題範囲から検討したところ、異なり約1,200字に占める割合は、上級レベルが大半であった。解剖学などを含むコメディカル専門語彙に難解な漢字が多いことは予想通りであったが、能力試験範囲外の漢字が160字(全体に占める割合が約13%)出現したことは、専門日本語の教育という立場から考えた時、注目すべき点と思われる。留学生は一般的に、大学入学前の予備教育段階では、文系・理系問わず一斉に日本語の授業を受ける。また、大学の入学試験において専門領域の高度な知識まで問われることはほとんどない。したがって、試験範囲外の漢字を予備教育段階で学習する可能性は極めて少ない。つまり、これら160字は留学生

が本学に入学して初めて目にする漢字であり、何らかの学習支援策を講じない限り、個々に自学自習するしかない。しかも、どの漢字が範囲外でどの漢字が範囲内であるといった情報は留学生には直接は与えられない。そのような状況の中、どの漢字を中心に学習すればよいか、適切な情報に効率よくアクセス可能な状態にすることによって、留学生の学習負担軽減の指針が提供できると思われる。

2. レベル別の検討および出現頻度の検討

レベル別に出現漢字を検討したところ、能力試験1級の試験範囲934字のうち今回の調査で出現した漢字は4割の371字であった。同様に第2水準は、110字のうち20字と2割に満たなかった。ここから、上級レベルの漢字の出現割合は高いが、その分量は決して多くはなく、各レベルで限られた漢字に的を絞って学習することにより、学習の効率化が期待できると考えられる。

出現頻度の結果からも、学習負担軽減の可能性が示唆された。表5にも示した通り、1級の出現漢字371字のうち、200字を適切に学習することによ

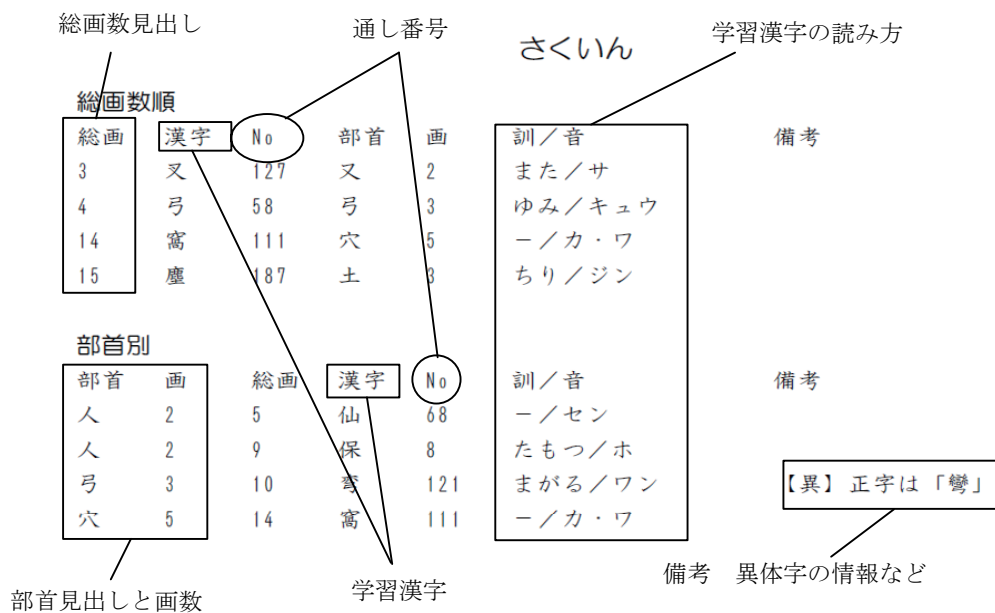


図4 総画数順および部首別索引の例



り、94%のカバーが可能であった。このように出現頻度別に漢字を配置しなおすことにより、効果的な学習支援のための基礎的な資料が得られると考えられる。

### 3. 学習漢字の選定とワークブックの試作

今回の調査の結果から選定した270字は、第2水準と範囲外160字および第1水準を中心とし、それに1級レベルで頻度の高い漢字を加えたものである。導入の順番は、1級レベル頻度上位88字から学習を始め、第2水準→範囲外→第1水準の順で進み、学期開始後3~4週目で1級レベルの専門語彙の漢字のうち8割弱の学習が完了する。さらに、5~6週目からは、留学生にとって未習漢字である範囲外の学習開始が可能である。このような基礎資料に基づく導入を通し、予備教育段階から専門教育段階へ移行していく支援策の一つを提供できるのではないかと考える。もちろん、どの漢字をどの順番で導入するか、出題範囲や頻度順のリストのどこに分割点を置くかは任意であり、日本語初級レベルの留学生を対象とした場合、漢字の選定に再考の余地は十分ある。そのような場合は、基礎レベルのクラスを並行して開講するなどの対策も必要であろう。

選定270字学習用のワークブックは、練習部分や索引の見やすさ、あるいは使いやすさなど授業を実践し、学生からのフィードバックを得て、今後改善を重ねていく必要がある。

## V. 結論

コメディカル専門語彙に使用される漢字について、留学生の学習支援のための基礎資料を得ることを目的とし、日本語能力試験の出題範囲と出現頻度に基づき調査を行ったところ、次の①と②の傾向が認められ、③が示唆された。

①コメディカル専門語彙に出現する漢字は、上級レベルの割合が高い。

②コメディカル専門語彙の漢字は、限られた漢字が繰り返し出現する。

③コメディカル専門語彙の漢字をレベル別・頻度別に配置しなおすことによる学習の効率化の可能性はある。

今回は、3冊の専門書に出現した延べ約1万2千字についてのパイロット調査であったが、今後データベースをさらに充実させ、今回の調査で得られた傾向が広い範囲で認められるか検証していく必要がある。また、徳弘(2005)の報告同様、ワークブックを用いた授業実践を通し、その効果を検証していく必要もある。今後の課題としたい。

## 文献

- 石鍋浩, 2007, 医療分野の専門用語に使用される漢字の出現傾向と頻度に関する調査, 専門日本語教育学会第9回研究討論会抄録, 10-11
- 国際交流基金, 2002, 日本語能力試験 出題基準〔改訂版〕, 凡人社, 5 39-40
- 鈴木庄亮ら, 2005, シンプル公衆衛生学, 南江堂
- 徳弘康代, 2005, 中上級学習者のための漢字語彙の選択とその提示法の研究—学習指標地の設定と概念地図作成の試み—, 日本語教育学, 127, 41-50
- 日本語教育学会編, 1982, 日本語教育辞典, 大修館書店, 292-295, 500-504
- 藤田恒太郎, 1947, 人体解剖学, 南雲堂
- 増田光司ら, 2004, 二漢字語を見出しとした医学術語学習辞典作成の試み, 専門日本語教育研究, 6, 49-54
- 増田光司ら, 2006, 留学生のための二漢字語に基づく基礎医学術語学習辞典, 凡人社
- 松元宏行, 2000, 医学系留学生のための専門日本語教育, 専門日本語教育研究, 2, 46-53
- Rothstein JMら, 2002, リハビリテーションスペシャリストハンドブック, 南雲堂